

# NTS物語

③ ビジネスモデルの確立へ向けて(第29回)

## 3-1編集企画体制への道(2)

出版事業②「ハンドブック」を作る ⑥「現代おさかな事典」(上)

代表取締役 吉田 隆

本はその内容による役割とは別に、当の出版社も意図しなかった役割を担うことがある。「表面科学の基礎と応用」(1991年発行)は、過去に発行された書籍より格段に多いアポ数が想定されたため、顧客データベース作成の必要性が生じ、NTSがコンピュータ環境を構築する引き金となった書籍である。そして、そのコンピュータ環境を社内から顧客へと拡張するバーコードシステム実用化の先導役を果たしたのが今回登場する「現代おさかな事典」である。本書は、NTS初の自然科学系書籍として発行し、他の理工系書籍とは異なる企画編集および営業体制で臨み、図らずもNTS転機に当たっての重要な役どころを果たした。その5年間のチャレンジの跡を辿ることにする。

### ●栽培漁業の父、本間昭郎先生

〇〇〇〇元営業部長の入社は93年6月だった。面接の際、カバンから一冊の青い並製本を取り出した。表紙には白抜きで「お魚事典」とある。厚さ4センチほどの書籍だが、頁をめくると空白だらけで一目で未完成だと分かった。「私の夢はこの本を完成させることです。」と語る〇〇の笑顔を見て、折に触れ思い出す。全漁連関連団体勤務中に水産庁の肝いりで作成したものの、予算不足で中途半端になったという。面白いと思い、半年ほど後に完成に向けて取り組み始めた。過去に経験のない自然科学系の本を作る話ではあったが、それから完成までの5年間、製作および資金両面において悪戦苦闘の連続になるとは予想だにできなかった。何はともあれ専門家の知見を得るため、フジテック在職中に面識を得た(株)日本栽培漁業協会専務理事本間昭郎先生を訪ねることになった。本間先生は、水産庁開発普及課長時代に真珠を始めとする栽培漁業の育成に心血を注がれた、我が国の養殖産業の功労者である。

### ●コンセプトは“魚場から食卓まで”

本書を軌道に乗せるにあたり、まずは私が担当することにした。〇〇ともども荒川区荒川の協会本部に本間先生を訪ねた。〇〇もまた全漁連時代に本間先生とはご縁があった。

「お魚事典」を完成したいという主旨に快くご賛同いただいた。まず編集チームの構成にあたり、昭和天皇のご指南役であり魚類学の権威、築地市場おさかなセンター資料館前館長・東京大学名誉教授阿部宗明先生を、また食文化に明るくお魚料理の研究者でもある文京区根津のちゃんこ料理専門店“土俵や”の山本保彦店主をご紹介いただいた。

山本氏の本書に向けた情熱には並々ならぬものがあった。編集会議は毎回“土俵や”で開催し、珍しい魚の入荷に会議日程を合わせていただいたので編集会議が楽しかった。阿部先生は80歳に近い高齢にも係わらず、毎回細い身体でひょうひょうと顔を出された。青表紙の「お魚事典」は空白が多い上、内容も不十分なため、全く別の本として作り直すことにした。山本氏には、長年のお魚料理探求の中で温めてきた、こだわりのキーワードがあった。会議の中で、従来のお魚関連書籍にありがちな魚類学、料理本のいずれかに偏るのではなく、両者を融合するという思想が浮上する中、そのキーワード“魚場から食卓まで”が本書のコンセプトとして確定した。

### ●“本文の執筆者”

その後、本文に議題を移した。魚種の選定は食卓に上るおよそ400種に絞り込んだ。各魚種の解説は、“魚場から食卓まで”のコンセプトに沿い、1.形態・生態等の生物学、2.漁法・産地・流通経路等の漁業、3.加工法・食べ方等の利用法の構成とした。次の議題はお魚の見せ方だった。写真ならば全ページカラーでなければ迫力がないが、当時のNTSの経済力を超えることになる。そんな中、阿部先生がこれを使ってみてはどうか?と、百年近く前に発行された英国の魚類学の名著を取り出された。素晴らしい点描画が全ページを飾っていた。著作権の束縛もないため、本書の点描画を採用することに決定した。

取組みから半年ほどが経過した95年夏頃から本文の著者の検討に入ったが、執筆者選びには苦勞した。400魚種夫々について見開き二ページに収めると全部で800ページとなる。内容の統一性からいえば、執筆者はできるだけ少数が望ましい。だが、それだけの

ボリュームを、生物学、生態、漁法、産地、流通、加工法、食べ方、食文化にいたるまで一人でカバーできる人はザラにはいない。青表紙の“お魚事典”の頓挫も、予算の問題だけでなく全国の漁連支部宛に依頼したにも係わらず情報不足で原稿が回収できなかったためと聞く。だが本間先生にはあてがあった。私は先生と川崎市麻生区の(株)水土舎を訪ねた。対応に出たのは乾政秀社長と石原元主任研究員だった。石原氏が中心となり水土舎が執筆を受けることで話がまとまったが、再訪時に提出された見積額に驚いた。確か1000万円を超えていたと記憶している。スタート時、本書の総予算は原稿料、印刷費・制作費等を合わせて500~600万円をめざしていた。原稿料が1000万円を超えるならば、総額は下手をすれば2000万円を超える可能性もある。残念ながら水土舎への依頼を断念することにした。乾社長によれば本業務は調査業務であり、コンサルタント業界の相場に基づくものであった。断念の意思を聞き山本氏は落胆されたが、私自身、自分が未知の世界に足を踏み込みつつあるのではないかと不安が頭をよぎった。本書には、既知の情報を編集し再構成するのではなく、未知の情報をゼロから生み出す研究調査に近い性格があった。だが、本間先生は事情を察知されると、迷うことなく新たなプランを提案された。本書制作の期間中、私は先生の常に前向きな姿勢に気持ちの上で随分救われた。



阿部宗明先生



山本保彦店主



本間昭郎先生

### ●編集後記

「お母さん、足の骨折った…」仕事中息子から携帯にメールが入っていた。柔道の授業中、畳の縁に足の親指を引っ掛けての骨折だった。高校時代サッカー部で正ゴールキーパーを目指していたときのことである。練習熱心がとりえだった息子には相当ショックだったが、不謹慎にもそのときの一言「歩くの大変。松葉杖をついても、骨折してないほうの足を疲労骨折しそう」で私は大笑いをしてしまった。平均寿命が80歳を超える今、骨にまつわる話題はつきない。「骨単」の著者である原島氏に今回のインタビューでお会いした。本当に人体って不思議、独学で全部勉強なされたことも驚き。不思議、驚きで終わってしまった気がする。牛乳を飲んで、今日も仕事に励みますか。(あしだ)

### ●編集部からのお願い

NTSニュースでは読者の皆様からのお便りや投稿をお待ちしております。また、開催予定の勉強会・イベント等、掲載をご希望される方は下記宛までご連絡ください。

〒113-8755 東京都文京区湯島2-16-16 (株)エヌ・ティー・エス「NTSニュース」係  
FAX: 03-3814-9152 E-mail: k-kunimoto@nts-book.co.jp

### NTSニュース

2004年5月号(通巻63号)  
2004年4月25日発行